

頑張りを認めてくれる環境を 次世代へつなげたい



輝け!大分のウーマン!

ONDERFUL
WORKING
WOMEN

02

入行したばかりの新人時代も、大変さより楽しさが勝っていた記憶が色濃い。「お客様と話すのが大好きで、早く窓口に出して欲しいと上司にお願いしました」。快活な人柄は接客にも長けており、預金や相続の相談にのりながら、目標数字の達成にやりがいを感じるように。支店が一丸となって働き、評価を得るチーム戦にも喜びを覚えた。

大分銀行が投資信託を扱い始めた当初からの個人営業担当でもあった。「新しく運用商品を取扱うので、とにかくお客様を第一に考え、精一杯努力しました」。今のように研修も多くはない時代で、応対の中で分からないことは本部に電話で回答を仰ぐ繰り返し。「実践するうちに知識がついて、楽しくなってきましたね」と振り返る。

努力が評価され、34歳で係長に。「まだ若過ぎるという意見もありましたが、当時の支店長が人事担当に何度も交渉してくれたそうです」。仕事ぶりが役職という形になった喜びと同時に、さらなるキャリアを目指した瞬間だ。キャリアの階段を上がり、次長として3年間は行内での特殊な効率化業務に就いた。本部の関係部署と支店の橋渡しをしながら試行を繰り返す日々。自身も業務の改善点や疑問点を提案し、時に挙がる現場の不安や迷いをやわらげ、微調整を重ねる。結果的に成功した施策を全支店へ広げられたことも、新しい自信へとつながった。



PROFILE

伊東 由美さん
YUMI ITOU

大分銀行
勢家支店 支店長

1993年入行。明野、鶴崎、滝尾支店を経て寒田団地支店(現しきど支店)で係長に就任。その後支店長代理、次長とステップアップし、日岡支店とソールン支店では事務の効率化を図る業務に邁進。今年6月勢家支店の支店長に着任。

令和2年度おおいた女性活躍推進事業者表彰受賞企業

責任をもち部下を評価できる 管理職を志す

支店長に就任した今、部下に伝えたいのは「頑張りは評価される環境が整っている」ということだ。一方で、支店の数が減り管理職のポストも少なくなっている中、女性登用の時代だから支店長になったと思われたくない、という考えももつ。「支店でも一番に動いて頑張るべきだと思って

います。その姿を見せていたらみんな頑張ってくれるはず」。部下が困ったことを助け、クレームを受けるのも然るべき責任。そして「自分自身も部下をきちんと評価したい」と自らが思い描く管理職のあるべき姿を目指す。

長く働いてきた職場への思いを再認識したのは、39歳の時、急性心筋梗塞で倒れてから。「3か月の入院と自宅療養の間に『銀行に帰りたい』と思ったんです」。復帰の際も勤務時間を徐々に増やしながら体調を気遣ってくれた職

場に、感謝の思いを抱く。

趣味の御朱印集めでは、国東半島や宮崎県高千穂町で神秘的なパワーを感じた。営業職の夫との会話や3匹の猫と過ごす自宅時間も心がオフになる瞬間だ。



PROFILE : 植木 克彦さん : 大分銀行
: KATSUHIKO UEKI : 執行役員 人財開発部長

多方面からの環境づくりに加え キャリア目指す意識改革を

2015年にダイバーシティ推進チームを立ち上げ、女性が働きやすい環境づくりを推進。女性の次世代リーダー育成を目指し、女性を対象としたマネジメントスキルアップセミナーや融資業務の研修を積極的に行う。育休取得後の復職時は配偶者と近い地域への転勤も可能。オンラインを活用した情報発信や、経験者によるパパママセミナーなど多方面からのサポートを実施。2019年にプラチナくるみんを取得、昨年は県のおおいた女性活躍推進事業者として表彰された。

環境の整備を進める中、課題となるのはキャリアを目指す

意識改革だ。「女性の管理職は全体の割合でいえばまだ少ない。同性のロールモデルを増やし、キャリアの築き方や達成感、満足感、成長する楽しさを伝えてほしい」。若い世代に感じるのは、仕事に臨む際の自己効力感の低さだ。それを打破するために必要なのは、研修や経験による本人の意識改革に加えて、上司がいかに部下を肯定できるか。「キャリアを積むにつれて大きくなる自身の役割や責任と上手に向き合いながら、部下の自信も育てられる管理職のロールモデルを増やしたい」と期待を込める。